

江北の四季

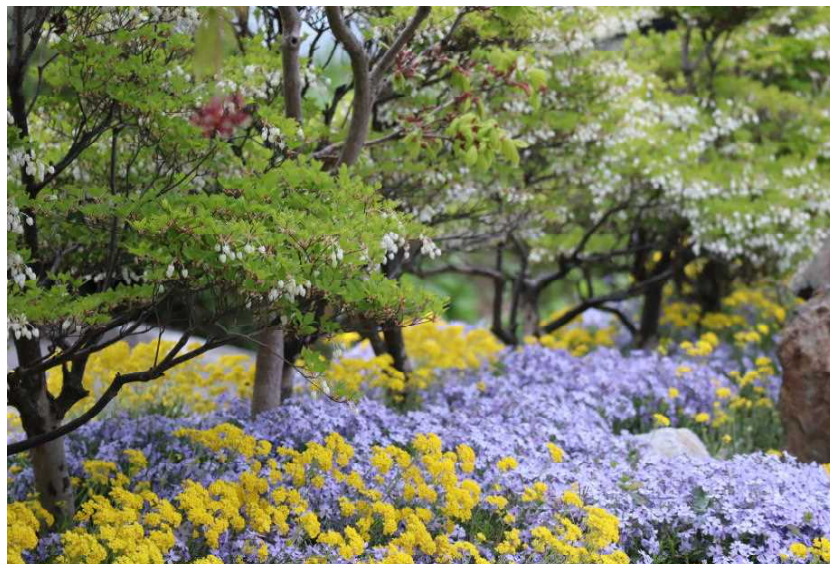
令和3年

4月18日

第50号



シバザクラ(芝桜)



イタヤカエデ ドウダンツツジ キバナアリッサム シバザクラ

○穀雨(こくう)

春季最後の節気。四月二十日～五月四日。
この時期に降る雨は、百穀を潤し芽を出させる春雨として「百穀春雨(ひゃつこくはるさめ)」といわれ、田畑は種まきの時期を迎えます。春に降る雨の呼び方は、穀雨の他にもあります。

催花雨(さいかう)

早く咲けよと促す雨

甘雨(かんう)

草木をうるおす雨

瑞雨(ずいう)

穀物を育む雨

菜種梅雨(なたねづゆ)

菜の花が咲くころに降る雨

迎え梅雨(むかえづゆ)

まるで梅雨のように思える梅雨入り

前の雨。



モッコウバラ

○七十二候

第十六候、穀雨初候、葭始生(あしはじめ)てしようず。四月二十日～二十四日。葭は、葦のこと。古事記や日本書紀によると、日本は「豊葦原瑞穂国」とよあしはらのみずほのくに」といわれ、葦が生い茂り、稲が豊かに実る国です。「あし」は、悪しを連想させるため、「よし(良し)」と呼ぶことが多いです。

第十七候、穀雨次候、霜止出苗(しもやんでないいづる)。四月二十五日～二十九日。暖かくなり、霜も降りなくなり、苗がすくすくと育ちます。田植への準備で、農家が忙しくなる頃です。

第十八候、穀雨末候、牡丹華(ぼたんはな)さく。四月三十日～五月四日。百花の王である牡丹が開花し始める頃ですが、我が家の牡丹は四月十五日に咲き出しました。桜と同様に例年より十日あまり早いです。



ボタン(牡丹)

牡丹は「花王」芍薬は花の宰相「花相」と呼ばれます。



シャクヤク(芍薬)

○八十八夜

立春から数えて八十八日目、五月一日は雑節の八十八夜。二十四節気や七十二候は古代中国でつくられ、日本の暦にも取り入れられています。日本では、日本の気候を表すには少し足りないため、いくつかの雑節が設けられています。「八十八夜の別れ霜」と言い、これ以降に霜は降りなくなると、気候が暖かく穏やかになります。また、「八十八」を組み合わせると「米」という字になることや、「八十八」は末広がり縁起がよいと、稲の種まきや茶摘みなどの農作業を始める目安にもなっています。しかしながら、今日ではビニールハウスのお陰で種まきもずいぶん早くなっています。



ワスレナグサ
勿忘草
英名は forget-me-not



フロナデシコ(袋撫子)



八重のヤマブキ(山吹)

○ヤマブキ(山吹)

一重のヤマブキは四月初めに咲きもう散ってしまいましたが、八重のヤマブキはこれからです。ヤマブキには、室町時代後期に活躍し江戸城を築いた、武将太田道灌のエピソードがあります。

ある日、城外に出ていた道灌は、急な雨に見舞われ、一軒の農家で蓑(雨具)を借りようとしたところ、中から若い娘が出てきて、黙って山吹の花の一枝を道灌に差し出しました。道灌は花を求めたのではないのにと、怒って城に立ち帰り、この話を家臣にしました。

家臣は、「それは『七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞかなしき』という古歌を踏まえたもので、娘は貧乏で道灌様にお貸しする蓑一つもございません」と答えます。山吹に託して告げたのです。」と答えました。これを聞いた道灌は自らの無学を恥じ、それ以来和歌に精進しました。

※ちなみにこの歌は後拾遺和歌集(ごしゅういわかしゅう)に収められており、「山吹の花は美しく咲くけれども実を全くつけないというのは不思議なことだ」という意。

☆ここからは蛇足

ヤマブキには、一重と八重、そしてシロヤマブキ(ヤマブキとは属が異なります)があり、一重のヤマブキとシロヤマブキには実がなりますが、八重のヤマブキは雄しべが花びらに変化しているので実がありません。このエピソードに出てくるヤマブキは歌のとおり八重咲きということになります。

一般に八重咲きの花は雄しべや雌しべが花びらに変化しているので、実がありません。よって、八重咲きのものは種ではなく挿し木や株分けで増やすことになります。



シロヤマブキ(白山吹)



オトコヨウゾメ

☆オトコヨウゾメ(オトコヨウズミではありません)ガマズミの仲間。名前が面白いので、柳生博のハケ岳倶楽部で一昨年買ったもの。ガマズミの別名がヨウゾメで、その実は甘酸っぱく生食できるのに対して、苦くて食べられないのでオトコがついたとか。

春の日の雨しき降ればガラス戸の

曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸のくもり拭^{ぬぐ}へばあきらかに

寝ながら見ゆる山吹の花

正岡子規

子規は病室のガラス戸からどのような思いで庭のヤマブキを見ていたのでしょうか。

ほろほろと山吹散るか滝の音

松尾芭蕉

やっぱり芭蕉はうまい。

○葉山椒(はざんしょう)

その昔、筆者が勤め始めた頃の話です。勤務地は南の方で、北陸線を利用して北から通っている者が十名ほどおり、「北陸線会」と名付けて、懇親会や泊まりの旅行を時々楽しんでいました。四月の人事異動が済むと、旧虎姫の某料理屋での歓送迎会が恒例となっていました。木の芽田楽がメイン料理です。コロナ禍で外食は難しくなりましたが、過日、路^{みち}の煮物に添えられていた葉山椒の匂いが、その時のメンバーや未熟ながらも一生懸命仕事をしていた頃の記憶を呼び戻してくれました。

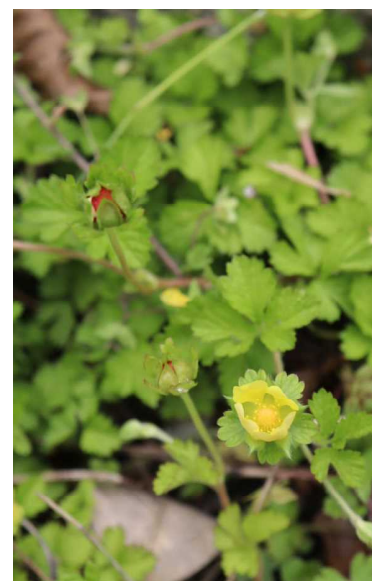
路^{どう}の臺に始まった「春は苦み」も、タラの芽やゼンマイ・ワラビなどを経て、山椒の実やタケノコで終盤となってきます。暑い夏が来る前に、春の苦みでしっかりと体づくりをしたいものです。



上 ナルコユリ
(鳴子百合)



下 スパラキシス
(水仙アヤメ)



ヘビイチゴ

☆ヘビイチゴ^{へびいちご}かげいかにも蛇^{へび}が潜^{ひそ}んでいそうな、田圃^{たんぼ}の土手や藪^{やぶ}陰^{かげ}に生育しています。蛇^{へび}とついているだけで、「触ると危険、その実には毒がある」と思いがちですが、普通に生食できます。イチゴほどおいしくないだけです。名前を忘れれば、非常に可愛い草花です。我が家の園路にはイチゴとともにあちこちに生えています。まったく、ついている名前が気の毒です。



アリウム・コワニー

☆アリウム・コワニーアリウムには多くの種類があり、ニンニクやネギも同じ仲間です。葉のない長い花茎を持ち、その頂部に球状または傘形の花がつけます。球状のギガンジウムは存在感抜群ですが、この写真のような傘形の花も愛らしくていいものです。



○カタバミ

(片喰 酢漿草)

片喰の名前はハート型の葉が一片食べられて欠けているように見えることから。

根にシユウ酸を含み、食べると酸っぱいことから酢の漿となり、漢字では酢漿草とも表します。日頃は、繁殖力が強く駆除に困る雑草としてしか見ませんが、よく見ると、ハート型の葉を三枚つけ、黄色くかわいらしい花を咲かせます。武家の間では強い繁殖力のあるカタバミのように、家がいつまでも絶えず続いていくという願いを込めて家紋によく使われたようです。日本の五大家紋(桐・藤・木瓜・酢漿草・鷹の羽)の一つとなっています。



アジュガ

☆アジュガ
耐陰性のある常緑多年草なので、日陰のグラウンドカバーにもってこい입니다。花の色や葉の色には様々なものがあります。

☆ゲラニウム
和名はフウロソウ(風露草)。たくさん種類のがあるようです。赤紫や白い小花が咲くゲンノシ

ヨウコ(現の証拠)は日本産の原種です。



ゲラニウム

○花

「桃花笑春風(桃花、春風に笑む)」という言葉があります。この言葉は茶席の掛け物としてよく使われます。「美しく咲いている桃の花が、春風に揺られて微笑んでいるようだ。」

人の姿は昨年と変わっても、花の姿はかわらないなあ。」というような意味でしょうか。一年前には非常事態宣言が出ました。コロナ禍の中、多くの人が亡くなっていますが、幸い今年も多くの花々に再び会えることができました。

また、「百花春至為誰開(百花、春至って誰が為にか開く)」という言葉もあります。「冬、何もなかったところに、春風が吹けば、次々と芽を出し、百花繚乱の景色となる。花はいつたい誰のために咲いているのか。」の意でしょうか。花は誰のためでもなく、ただその花の命を全うしているだけです。ですが、それを見ている私たちを楽しませ、人生を豊かにしてくれます。その花々との出会いを、一瓶の内にいける時間を持つことは、なんと嬉しいことでしょうか。そして、その一瓶に花の命を表現できれば何と素晴らしいことでしょう。

一木一草に心躍る毎日でありたいものです。

よく見れば 薺花咲く垣根かな 芭蕉

☆今号をもって休刊とさせていただきます。

ご愛読、ありがとうございました。

